



# 営農タイムリー！



## 発生予察情報について(7月)

2022年6月29日発行

### 病害虫発生予報第5号(7月)

京都府病害虫防除所より、7月の予察情報が発表されました。

#### 病害虫発生予察第5号(7月) (抜粋)

作物名	病害虫名	予想発生量 (平年比(前年比))
イネ	葉いもち 紋枯病 シジロウンカ ツマグロヨコバイ 斑点米カメムシ類	<u>やや多</u> (並) 並 (やや少) 並 (並) 並 ( <u>やや多</u> ) <u>やや多</u> (並)
ブドウ	べと病	並 ( <u>やや多</u> )
カキ	うどんこ病	<u>やや多</u> (並)
果樹全般	カメムシ類	<u>やや多</u> ( <u>やや多</u> )
果菜類	疫病・褐色腐敗病 うどんこ病 アブラムシ類とモザイク病 アザミウマ類 ハモグリバエ	並 (並) <u>やや多</u> (並) やや少 (やや少) <u>やや多</u> (多) 並 ( <u>やや多</u> )
ウリ類	べと病 炭疽病	<u>やや多</u> (多) 並 (並)
キュウリ	斑点細菌病	並 (並)
ネギ	ネギアザミウマ と ネギえそ条班病 ネギハモグリバエ	並 ( <u>やや多</u> ) やや少 (並)
野菜全般	ハダニ類	<u>やや多</u> (多)

# イネ

## 1. 葉いもち

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 補植用苗が葉いもちの発生源となるので、放置したままの苗は早急に抜取り処分する。
- (2) いもち病の発生は気象に大きく影響されるので、曇雨天が続く場合には注意する。
- (3) ほ場の見回りを行い、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に多肥田や山間、山沿いの水田では注意する。

## 2. 紋枯病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比やや少ない)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 分けつ期ごろに水際葉鞘に発生し、その後水平、上位方向に進展する。
- (2) 早植栽培で発生が多く、気温30℃前後で多湿条件が続くと多発する。
- (3) 出穂20日前の発病株率が20%以上であれば薬剤散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着するように株元を狙って行うようにする。なお、穂いもちとの同時防除を考慮する。
- (4) 昨年多発したほ場では、深水管理をしない。
- (5) 窒素の多用を避け、過繁茂にならないよう施肥管理に注意する。

## 3. セジロウンカ

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 梅雨期に海外から飛来し、吸汁加害する。
- (2) 梅雨前線の活動が活発化すると多飛来することがあるので注意する。
- (3) 7月中旬以降、ほ場を見回り、株当たり10頭以上の発生を認めた場合は防除する。なお、幼虫は株元に生息しているので、薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。

## 4. ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 直接吸汁加害する他、萎縮病等を媒介する。

## 5. 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいるが、特に、カスミカメムシ類による被害が増加している。
- (2) 水田周辺のイネ科雑草の穂を餌にして増殖し、本田へ侵入するので、草刈りを行い、イネ科雑草の出穂を防ぐ。
- (3) 草刈りは出穂2～3週間前と出穂直前の2回行うと効果的である。1回で済ませる場合は、出穂10日前までに行う。なお、刈取り時期が遅れると逆効果になるので注意する。
- (4) 近年多発し問題となっている地帯では穂揃期と傾穂期の防除(共同、一斉)が有効である。
- (5) 平成22年に、府内で初めてミナミアオカメムシの発生を確認した。これまでに山城地域と丹波地域の一部で本種の発生を確認している。本種は、他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。

## 6. ブドウ ベと病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨が多く、気温が低めに経過すると多発しやすい。
- (2) ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。

## 7. カキ うどんこ病

予報内容 発生量 : 平年比やや多い (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 夏季の高温時には病勢が治まるが、冷夏の年は分生子の飛散が続き、発病が続く。

## 8. 果樹全般 カメムシ類 (チャバネアオカメシ、クサギカメムシ等)

予報内容 発生量 : 平年比やや多い (前年比やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 園外から飛来し局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。
- (2) ナシ、モモなどの無袋栽培やカキ、カンキツでは被害が多くなる。

# 野菜

## 1. 果菜類 疫病・褐色腐敗病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は水媒伝染するので、ほ場の排水に努める。特に、降雨時の地表水を速やかに排水する。
- (2) マルチを行い、泥によるはね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。

## 2. 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量 : 平年比やや多い (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
- (2) 施設栽培で発生しやすく、高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (3) トウガラシ類では、ハダニ類による被害と判別が難しいので、被害葉を十分に観察する。
- (4) 菌糸が組織内で増殖するため薬液が十分付着するよう、ていねいに散布する。

## 3. ウリ類 ベと病

予報内容 発生量 : 平年比やや多い (前年比多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温20～25℃で、曇雨天が続くと発生しやすい。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えると発生が多くなるので、肥培管理に注意する。

## 4. 野菜全般 ハダニ類 (チャノホコリダニを含む)

予報内容 発生量 : 平年比やや多い (前年比多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 梅雨明け後急激に増殖するので、梅雨明け後の防除が大切である。
- (3) ハウス栽培では天候に関わらず発生しやすい。
- (4) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。



# 野菜

## 5. 果菜類 アブラムシ類 と モザイク病

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年比やや少ない)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散・飛来し、発生が拡大する。
- (3) キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に特に注意する。

## 6. 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマ等ウイルス病を媒介する種もいる。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では、高温乾燥が続くと特に多発しやすいので注意する。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

## 7. ネギ ネギアザミウマ と えそ条斑病

予報内容 発生量 : 平年比並 (前年比やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ネギアザミウマは、年間10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種はアイリス黄斑ウイルス(Iris yellow spot virus: IYSV)による病害でネギえそ条斑病を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる殺虫剤をローテーション散布する。
- (6) 新系統(産雄性生殖系統)と在来系統の殺虫剤感受性は異なるので、新系統の発生を確認している地域(山城及び南丹地域)では注意する。

## 8. 果菜類 ハモグリバエ類

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 苗からの持ち込みを防ぎ、被害植物の残さは土中に埋めて処分する。施設栽培では、開口部に0.8 mm 目合いの防虫ネットを張る。
- (2) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (3) 発生を認めたら被害葉を取り除き、発生初期の防除に留意する。
- (4) 施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

## 9. ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (4) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA(従来系統)とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB(別系統)の発生を確認しているので注意する。

# 今後注意すべきその他の病害虫等

## イネ

### 1. トビイロウンカ、コブノメイガ

6月第2半旬現在、トビイロウンカ及びコブノメイガの予察灯での誘殺を認めていない。いずれも海外飛来害虫であるため、今後梅雨前線が北上したり、活動が活発化すると多飛来することがあるので、予察情報に十分注意する。

### 2. 白葉枯病

- (1) 暴風雨などが予想される時は深水にするなど、極力葉の損傷を少なくするよう努める。
- (2) 窒素肥料の多用を避けるほか、茎立後、葉が濡れているときにほ場に入らないなど注意する。

### 3. イチモンジセセリ(イネツトムシ)

6月中旬現在、丹後地域で発生を認めている。晩植田や窒素過多の田で発生が多くなる。防除時期は7月下旬～8月上旬の幼虫ふ化期である。

### 4. フタオビコヤガ(イネアオムシ)

- (1) 6月中旬現在、丹後地域で発生を認めている。山間・山沿い地域や集落周辺など、風通しの悪い水田で多発しやすく、曇雨天が多い年に発生しやすい。
- (2) 出穂前後に発生する世代の加害が多いと被害が出る場合がある。幼虫が4、5齢に成長すると摂食量が増加するため、被害が急激に拡大するので注意する。

### 5. イネクロカメムシ

- (1) 常発地では注意する。
- (2) 6月中旬から7月上旬が越冬成虫の水田への移動の最盛期であり、この時期の薬剤防除が最も有効である。ほ場をよく観察し、3株に1頭以上の発生(幼虫を含む)を認めたら防除を実施する。

# 今後注意すべきその他の病害虫等

## 野菜

### 1. 褐斑病（キュウリ）

発生すると被害が大きいため、夏秋キュウリでは注意し、下葉の摘葉、摘心等の予防に努める。

### 2. タバコガ類

果実に食入すると散布薬剤の薬効が低下するので、早期発見に努め、食入前及び若齢期の防除に留意する。

### 3. ハスモンヨトウ

- (1) 卵塊は綿毛状のもので覆われ、ふ化した幼虫は若齢期を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く透け見えることから「白変葉」と呼ばれ、発生初期の目安となる。
- (2) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効力が著しく低下する。